

緒川村

本郷遺跡発掘調査報告書

1986

茨城県那珂郡緒川村教育委員会

目 次

序

例 言	3
1. 調査に至るまでの経過	4
2. 遺跡をとりまく環境	6
3. 緒川村の遺跡分布	8
4. 調査の概要	9
(1) A 地点の調査	10
(2) B 地点の調査	11
5. B 地点出土土器破片の観察	15
6. 発掘調査日誌	17
○ 図 版	21
○ 発掘調査会役員及び作業従事者名簿	27
む す び	28

例 言

1. 本書は、那珂郡緒川村大字上小瀬字仲原に所在する、本郷遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は緒川村教育委員会が主体となって実施した。
3. 発掘調査は、荻原義照を担当者に、緒川村文化財保護審議委員、また茅根正憲を調査員として実施した。
4. 本調査は、農道の拡幅面という限られたため、部分的なトレンチ調査となった。従って遺構が確認されても、調査区の拡張は行なわなかった。
5. 本書の作成にあたっては、遺物の整理に、熱心に御協力いただいた、岩瀬町考古研究グループの須田進、安達登の両氏には、明記して感謝の意を表したい。

緒川村本郷遺跡発掘調査報告書

1. 調査に至るまでの経過

本郷遺跡のある、斜面部の畑地を所有している岡崎氏から、農作業の効率化のために圃場の整備をしたいが、その取扱いについてどのようにしたらよいか、緒川村教育委員会に照会があった。

それをうけた村教育委員会は、水戸教育事務所へ、その対応と処置について連絡した。

次いで水戸教育事務所文化

財担当の青木社会教育主事、同埋文担当の萩原指導員は、緒川村教育委員会鈴木社教係長の案内によって、昭和60年9月5日現地を訪問調査した。現地は砂礫の多い緩斜面に、大豆とさつまいもが栽培されてあった。表面調査の限りでは、遺物の散布はさほど多くはないが、とにかく遺構・遺物の有無についての、確認調査（試掘）をすることにした。その時期については、大豆の収納後に行うこととし、地権者・教育委員会へ発掘届等に関する、事務手続きについて指導助言した。

表探遺物、立地条件、表土の観察や、教育委員会の意見にもとづいて、次の要領によって、予備調査を実施した。

緒川村本郷遺跡予備調査実施要領

- (1) 所在地 緒川村大字上小瀬字仲原2803番地外
- (2) 立地 緒川の右岸山地（舌状地）の斜面畑地
- (3) 実施主体 緒川村教育委員会
- (4) 期日 昭和60年11月8日
- (5) 調査員 緒川村教育委員会社会教育係鈴木係長
水戸教育事務所青木社教主事、同萩原埋文指導員
- (6) 目的 畑地の圃場整備に伴い、遺構の一部破壊が予想されるので、事前調査を行い、本調査の必要の有無について確認する。



遺跡全景

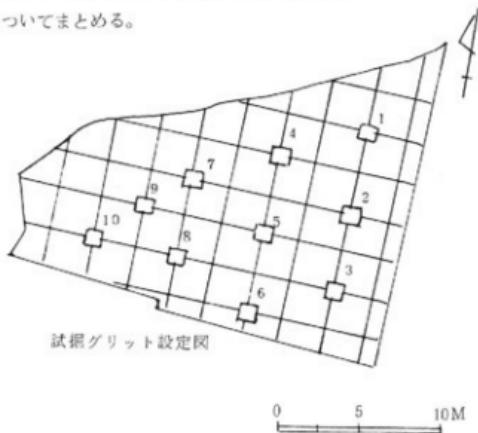
(7) 方 法 グリット法による。設定されたグリット ($2 \times 2 m$) を発掘し、地層とその間における、遺構、遺物の有無について確認する。

(8) ま と め 調査結果についてまとめる。

○ 考 察

標高 5.6.2 m を測り、北から南へ緩やかな傾斜を示している。調査は、表土が浅く、砂礫が混在した、黒褐色の硬い土質で、黒色土の堆積は少ない。これは傾斜地のため、下方へ流出したためと思われる。

グリット No. 1 ~ 4 から遺物はみられず、土層の乱れも見られ



なかった。

No. 5 ~ No. 6 から、縄文時代中期の土器破片が埋土中から出土したが、住居跡等の遺構の確認はできない。

No. 7 ~ 10になると、縄文土器破片の出土が多くなってきた。特に No. 9 は、多数の土器破片が埋蔵された遺物包含層を確認

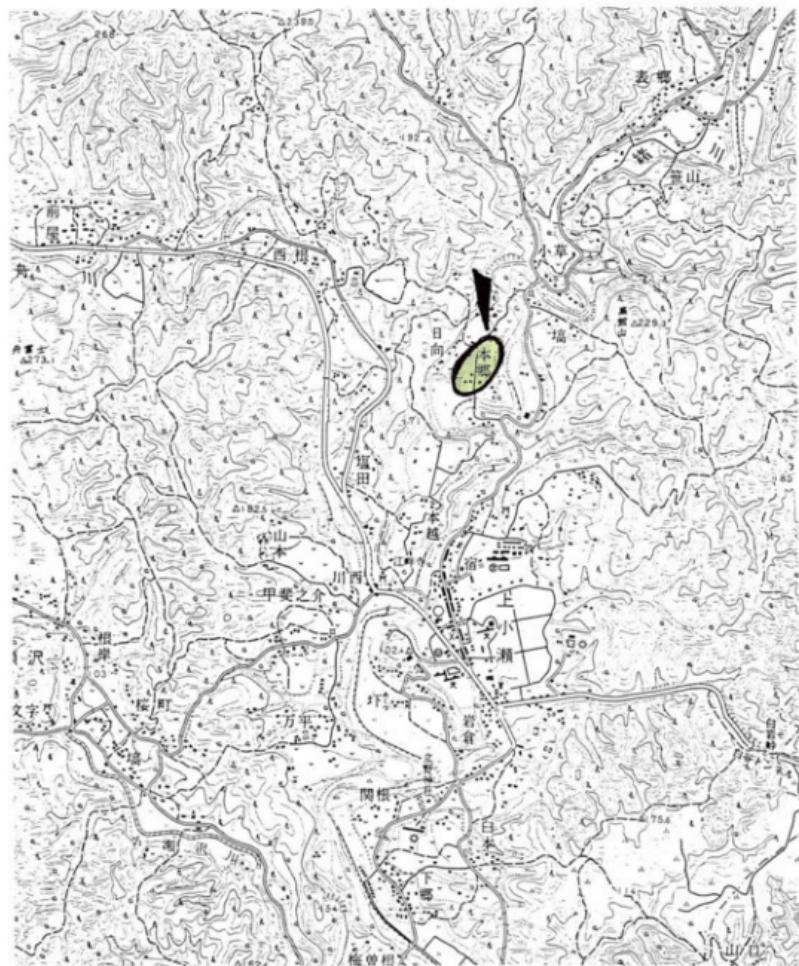
することができたので、発掘作業を中止し、村教育委員会に本調査の必要を報告した。

これをうけた村教育委員会は、緒川村の農道改良整備計画によって、本郷遺跡内を縱断する、仲原地区農免道路の拡幅工事が、昭和61年度早々に着工が予定されているので、これに先立って遺構に係ると思われる。切上部分についての調査を考えているので、については、工事施工原因者が異なるが、同一遺跡内のことなので、圃場整備地区の一部も合せて調査したい。それについての必要経費は、補正予算で計上し、村の単独経費で実施したい旨の、連絡と調査の依頼があった。

以上の処置については、長山村長、岡崎教育長をはじめとする、村当局の理解ある態度に深く敬

意を表したい。

2. 遺跡をとりまく環境



本郷遺跡位置図

緒川村は、八溝山地に属する山村で、わずかに緒川流域に、平地が細長く延びている。昭和31年9月29日、旧小瀬村、八里村を合併して、緒川村が誕生した。その村名の由来は、古くから、地域の人々の生活にうるおいと、生活に適した環境を創り出してきた、緒川の流れによって生まれた。

緒川の水源は、隣村美和村の鷺子山に発して、上松沢から上小瀬の本郷へ、そして村の略中央に入り、更に南下し、御前山村野口に出て、那河川に合流する。

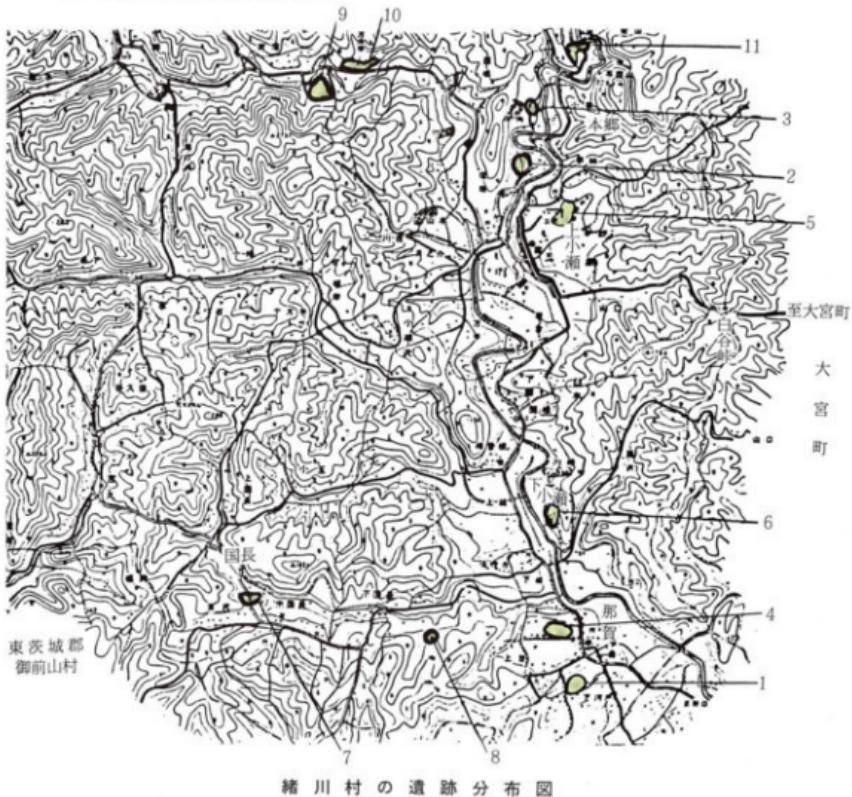
地質的には、その基底層の大部分は、中生層を形成しているが、緒川沿岸の表層は、疊・砂・粘土から成る堆積岩で、鷺子山層群といわれる、砂礫層が分布している。

本郷遺跡は、緒川の流れを眼下にした、緒川村大字上小瀬字仲原の日向台に所在する。

遺跡の東方緒川の対岸に、標高229.3mの古城跡高鎌山が、西方に南北朝時代 佐竹の族小瀬義春の拠った「ゆうがい山」を左右にして、八木山の南麓舌状台地にひろがっていた。遺跡の現況は、農免道路をはさんで大半が畠地となっている。

3. 緒川村の遺跡分布

○ 遺跡の分布図と遺跡地名表

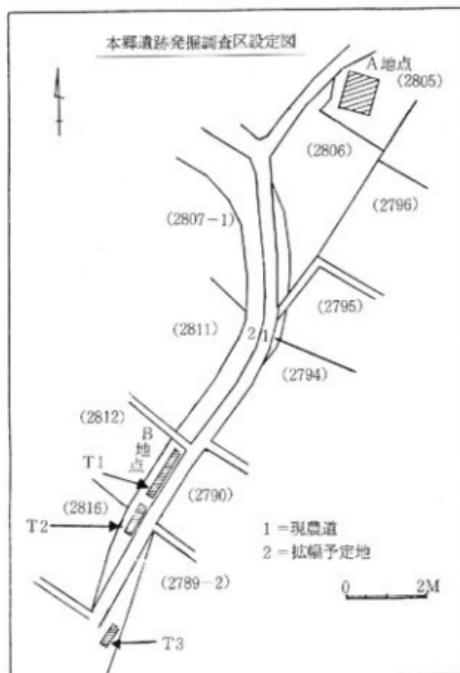


緒川村の遺跡分布

号	遺跡名	所 在 地
1	梶内遺跡	緒川村那賀字梶内 541
2	上ノ台遺跡	同 上小瀬字上ノ台
3	本郷遺跡	同 上小瀬字仲原 2800
4	那賀河城跡	那賀字御城 667
5	松原遺跡	同 上小瀬字松原 1885
6	川崎遺跡	同 下小瀬字川崎 1229
7	国長平遺跡	同 国長字平 1238
8	堂の入遺跡	同 国長字塙倉 289
9	上の平遺跡	同 大字小舟 2711
10	四方木平遺跡	同 上小瀬 3489
11	豆入平遺跡	同 上小瀬 2687

4. 調査の概要

調査は、昭和61年1月24日から27日の4日間にわたって実施した。調査区の設定は、圃場整備が予定されている畑地に、試掘の結果などを参考として、調査区A地点を、また農道拡幅整備箇所に、調査区B地点を設定して、発掘調査を進めた。



調査区設定図



調査前の打合せ

(1) A 地点の調査

本地点は、圃場整備区域の北西隅に当たる部分で、標高56.2mを測り、北から南へ緩かな傾斜を示している。試掘時土器破片が大量に包含されていた、試掘グリットNo.9を中心に、100m²の範囲にグリット(2×2m)を10か所設定して、掘り込みを行った。調査区全面に砂礫が混在した、黒褐色の硬くしまった土層のため、除土作業は困難した。



発掘風景

見学者の老人の談話によれば、ここには大正時代の中頃まで、民家の住宅や納屋などが建てられてあった場所で、途中火災に逢って宅地替えになり、その後畠地に転用したところであるといつてくれた。この情報は、発掘が進むにつれて、断面に搅乱したような層位が現れてきた。

各グリットとも、縄文土器の破片が大量に埋土され、その中には赤く焼けた石塊や、土器片も出土した。恐らくこれは、炉に使用した石組と、埋壺炉に使用したものと考えられるが、調査区には、住居跡と思われる遺構の確認はできなかった。しかし大量に埋土された、土器包含層の成因は、堅穴住居跡が廃棄され、上屋が倒れ、堅穴が埋没していく過程で、流入した遺物が層を成して堆積したか、また使用済みの土器や石器が捨てられたか、そのどちらかと思われる。本郷遺跡のA地点を見る限りでは、大量に埋土された土器層からみて、最初から集落内の土器廃棄場であった可能性が強い。

出土した遺物を類別してみると、縄文時代中期を中心に、前期から後期に及ぶ、大量な土器破片

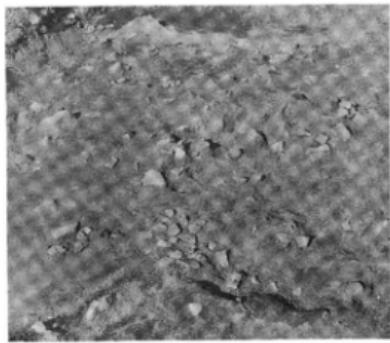


発掘風景

が採集された。これらによって遺物の編年を知るうえでは、貴重な資料である。しかし層位の搅乱が多いので、土器堆積の状態が、下層、上層が混在しているため、編年の組み立てには問題があるが、この土器群から、緒川流域の縄文文化を知るうえで極めて重要な遺跡というべきである。

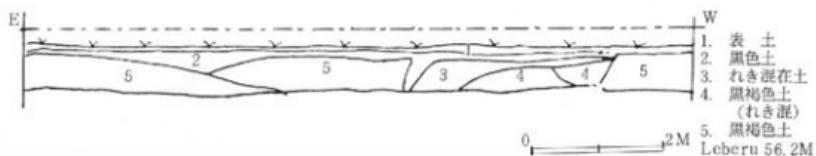


A 地点出土石器



遺物出土状況

本郷遺跡 A地点セクション (a)



本郷遺跡 A地点セクション (b)



(2) B 地点の調査

本地点は、現農道に添って、拡幅整備予定地のうち、切土部分にトレンチ 3 本を設定し、遺構遺物の確認調査を進めた。調査は短期間のため、表土の除土作業については、細心の注意を払いながら、土木機械を利用した。

○ No.1 トレンチは、南北方面に幅2m長さ13mのものを設定した、層位の攪乱はあまりみられないが、北寄りの西側壁面に、黒土の落ち込みと、鹿沼土のブロック、白色粘土、また炉組に使用したと思われる河原石の配石遺構が検出された。そのほか径1mの上抵抗の落ち込み内に、多数の土器破片が埋土されて出土した。

調査面積が限られた小範囲のため、トレンチ内に、住居跡の全体遺構を出すことができなかった。



B 地点 T - No. 1 発掘風景

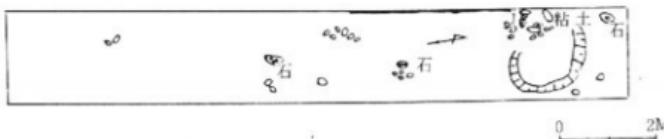
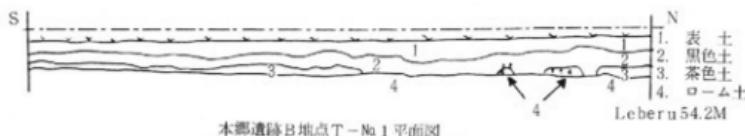


遺物出土状況



B 地点 T - No. 1

本郷遺跡B地点T-No.1西壁セクション



○ No.1 トレンチ出土遺物

① 深鉢形縄文土器

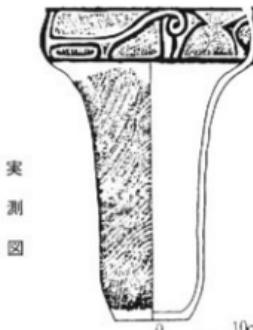
この土器は、A地点T-No.1の炉の近くに、埋没されて出土した、深鉢形の縄文土器である。一部欠損しているが、復原可能な状態で出土した。土器は加曾利E-2式に比定されるもので、口唇部上面に凹形の沈線を巡らせ、口径25.5cm高さ35.5cm底部径9.0cmを計る深鉢形である。口縁部から胴部底部にかけて、全面に渦巻文とクツワ形文が、劍菱の降帶に開まれた、見事な口縁部の装飾がみられる。口縁部は内湾し、頸部で強く括れて円筒状に近い胴部へ移行する。器形全体としては、斜縄文を地文とし、平縁中形のキャリバーフ 形土器で、焼成良好である。



拓影図



深鉢形縄文土器



実測図

② 凹 石

凹石は、別名雨垂石、蜂巢石とも呼ばれ、石皿・石棒・丸石などの表裏に、多数の孔があいているので、そう呼ばれている。また発火石ともいわれたが、石と木を擦り合わせても、実際は発火しない。現在のところ、凹石の用途については不明である。

○ №2 トレンチは、T-№1の南へ、道路敷に添って、幅2m長さ8mを設定し、掘り込み排土を行った。地表下60cmで地山に達し、道路東側壁面に、黒色土の落ち込みが確認された。これは住居辺縁の一部で、全体遺構は道路敷の下に所在すると思うが、調査区外にあるため、全容を明らかにすることはできない。

またトレンチ内南寄りに、径60cmのpit状のものが一か所認められたが、中から何も発見することができず、その用途は詳かでない。

出土品は、ローム面に河原石7個と、繩文土器片が採集された。

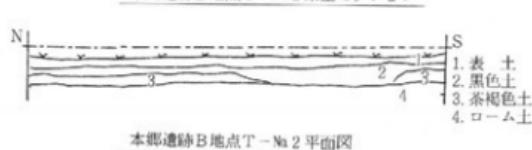


B地区 T-№2

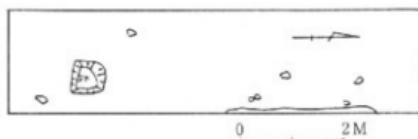
○ №3 トレンチは、遺跡の所在する仲原日向台の先端部で、道路の東側畑地に幅2m長さ5mのトレンチを設定した。表土が浅く20cm程でローム面に達するため、耕作によって表土は、ローム粒子が多く含んだ、軽い黄褐色を呈している。

トレンチ中央に径80cm底径20cm深さ70cmの土壠が検出され、壠内に土器片が埋土され出土した。

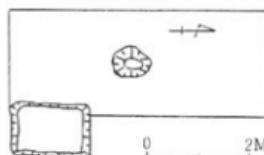
またトレンチ内東北隅から張り出した、長方形の深い落ち込みを掘り込んだが、その用途は不明である。



本郷遺跡B地点T-№2 平面図



本郷遺跡B地点T-№3 平面図



5 B 地点出土土器破片の観察

本郷遺跡から出土した土器群は、縄文時代前・中・後期に及んでいるが、出土したものは小破片のため、どのような器形であったか、確たる判別はできないが、観察の大略は次の通りである。

(1) B 地点No. 1 トレンチ出土土器

4は、粗い縄文を地文とし、沈線懸垂文を施している、胎土に砂粒を含む、色調内面黒、外面褐赤。5は、粗い縄文に沈線の円弧と思われ、器形は小破片のため不明であるが、鉢形土器の胴部片か、焼成良好。8・9は、地文縄文に2条の沈線が引かれ、その中間を棒状工具による、波状沈線が横走、地文の縄文は摩滅している、色調内面淡褐色、加曾利E期の後半。12・18は、縄文を地文として、沈線と無文帯を懸垂する、どちらも鉢形土器の胴部片である。7・9・20・24・26も沈線を懸垂する鉢形の胴部片。13は、本郷遺跡唯一の羽状縄文の小破片、関山式に比定される縄文前期か。19は、無文地に刺突文を、横位と斜位に施す、胎土雲母混在、色調内外とも暗褐色、阿玉台に比定される。25は、単節斜縄文を地文とし、2条の沈線文を施した、鉢形土器の頭部破片で、加曾利E期、胎土砂粒含む。28・32は、直線状の横目文が斜位に施されている、鉢形土器の胴部破片か、色調内面黒、外面黒褐色、焼成あまり良くない。30は、深鉢形の縄文地に貼りつけ隆起文、キャリパー形を呈する口縁部から頭部片で、加曾利E 2式に属する、色調内外とも暗褐色、焼成良好。31は、縄文を地文とし、沈線による渦巻文の連続と思うが、小破片のため全体の器形不明、色調内面黒外面黒褐色。23も、同様の破片で、2条の沈線が横走している。35は、削毛目文の条線間に、沈線のある浅鉢形の頭部破片で、色調内面赤褐色、外面淡褐色、焼成良好。36は、口縁部近くの小破片と思われるが、微隆起線文、良質の粘土で焼成されたもので、色調内外とも黄褐色。37は、太い沈線によって成形された、大きい鉢形の加曾利E 3式に比定される。38は、文様帶が退化して、唐草様の隆起文がみられる、深鉢形の把手破片。その他1・2・3・6・11・14・15・16・17・21・22等は、いづれも加曾利系の縄文を地文とした小破片である。

(2) B 地点No. 2 トレンチ出土土器

6・8・20・21・23・25は、条線文系の土器で、特に23は、縦位に深く引いた、沈線の円弧が施してある。器肉が厚く、大型の鉢形土器片。その他条線文の中に、2条・3条の沈線を懸垂してある。これらの太い沈線や条線文が主体となった土器は、田戸下層式に比定される。

11・16は、同一個体の破片で、加曾利E 3式に比定されるもので、太い沈線で区画した、舌状突起の口縁である。色調は外面黒色、内面褐色、焼成良好。

1・2・7・9・12は、同系の破片で、撲糸文を地文として、2条・3条の沈線を懸垂している。9は、T-No. 1の31と、同一個体の破片であろう。2は、波形の沈線が施してある。色調は内外面

とも黒色で、胎度に砂粒を含んでいる。

3・4・5・10は、同一系の破片で、撚糸文を地文とし、沈線を1条・2条巡らしている、全体の器形は不明。26は、櫛目文の小破片で、T-Na 1の32と同一系の施文。

6. 発掘調査日誌

緒川村教育委員会

昭和61年1月24日 金曜日 天気(晴) 検印 本橋久則		
主任調査員	萩原義照	作業人員
調査員	茅根正憲	10名
補助員	鈴木光雄、坪清巳、糟谷式部	
作業員	須田進、安達登、岡崎武一 岡崎時枝、岡崎うめ	
記録	午前9時作業開始 本郷遺跡A地区のグリット設定 掘り込み開始 表土下50cmの所から、遺物包含層検出 上器、縄文中期、石器、破片多数 午後4時30分作業終了	
		記録者 鈴木光雄
備考	見学者 長山清勇、森嶋武夫、森嶋末吉、岡崎義行、内田勝子	

発掘調査日誌

緒川村教育委員会

昭和61年1月25日 土曜日 天気(晴) 検印 本橋久則		
主任調査員	萩原義照	作業人員
調査員	茅根正憲	16名
補助員	鈴木光雄、坪清巳、桑名精一(レベル) 高井良男、石川豊、小野関雄	
作業員	岡崎武一、岡崎時枝、岡崎うめ 笠井忠(バックホー作業) 須田進 安達進、大和田勤、森鶴徳重	
<p>午前9時、作業開始</p> <p>A地区内 グリットの掘込み続行</p> <p>記 B地区 トレンチ設定、掘込み</p> <p>石器、土器検出、遺構確認できず。</p> <p>A地区 レベル測定(高さ 56.6m) 及び平板測量</p> <p>B地区 レベル測定(高さ 54.2m)</p>		
録		
記録者 鈴木光雄		
備 考	<p>来訪者</p> <p>水戸教育事務所、大川課長 青木社教主事</p> <p>緒川村教育委員会、岡崎教育長 本橋事務局長</p>	

発掘調査日誌

緒川村教育委員会

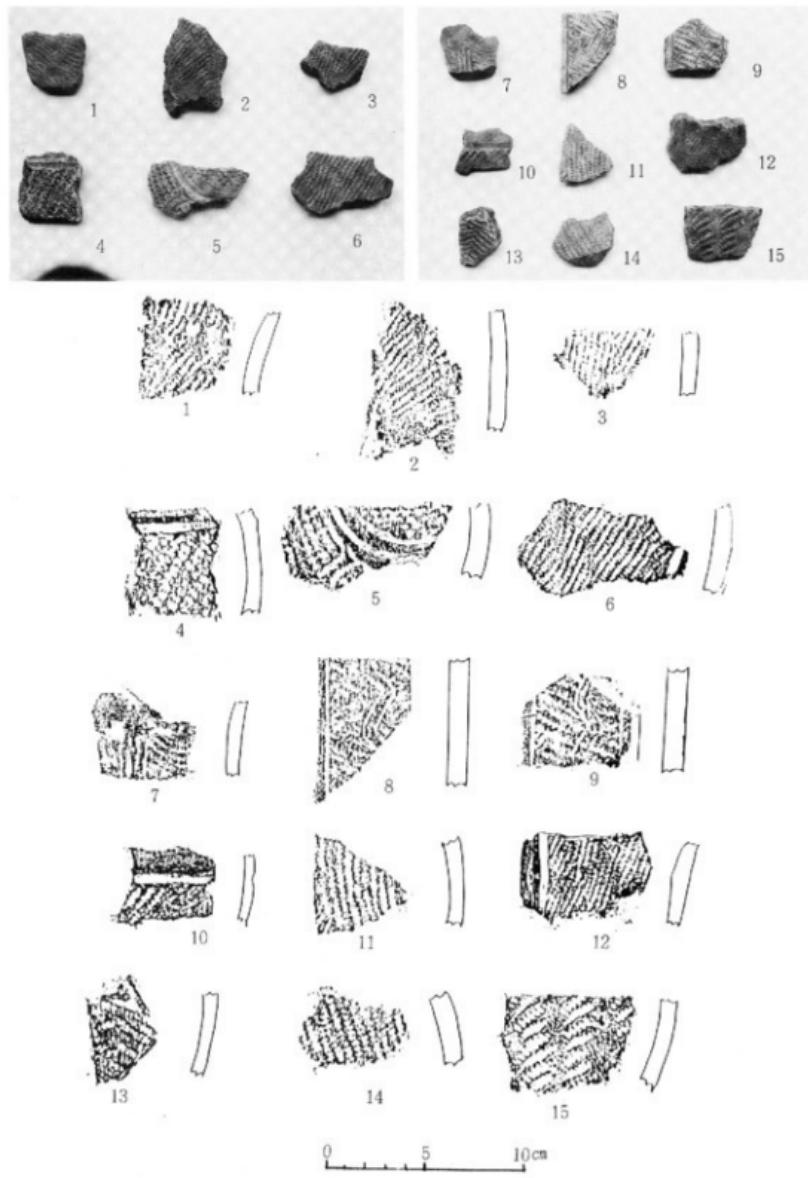
昭和61年1月26日		日曜日	天気(晴)	検印	木橋久則		
主任調査員	萩原義照			作業人員			
調査員	茅根正憲			12名			
補助員	鈴木光雄、内田義則、糟谷式部 高井良男、小野閑雄						
作業員	岡崎武一、岡崎時枝、岡崎うめ 須田進、安達登						
記録	<p>本郷遺跡A地区</p> <p>各グリットの清掃及びグリットはずし セクション図作成、写真撮影</p> <p>本郷遺跡B地区</p> <p>掘込みと清掃 No.1 トレンチ、実測(測量) $1/50$ 縮尺 セクション図作成 1ヶ所落ち込みを確認したので、住居地想定す。 No.2についても落ち込み確認 平板測量 縮尺 $1/50$</p>						
	記録者 鈴木光雄						
備考							

発掘調査日誌

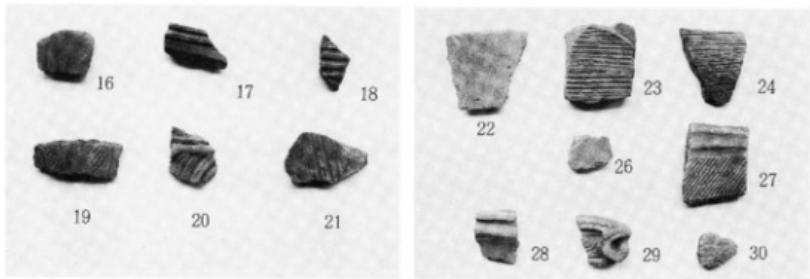
緒川村教育委員会

昭和61年1月27日 月曜日 天気(晴) 検印 本橋久則

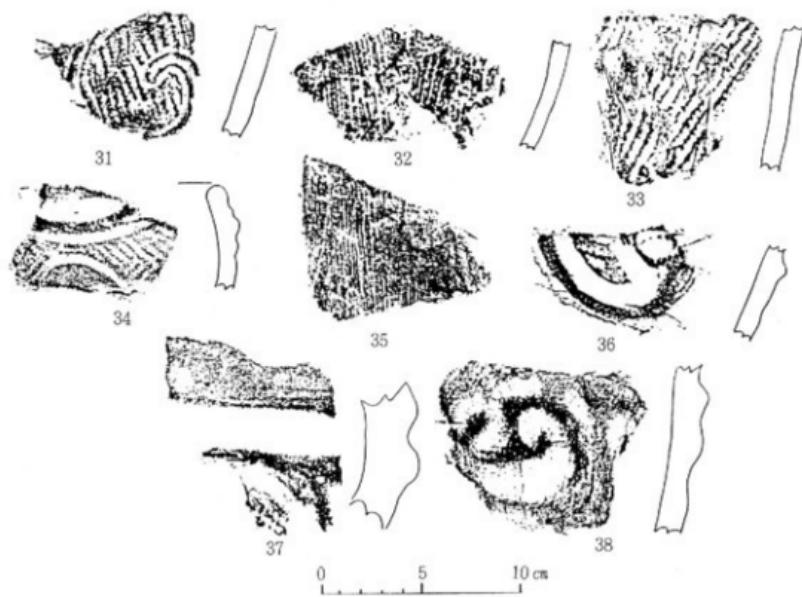
主任調査員	萩原義照	作業人員
調査員	茅根正憲	12名
補助員	鈴木光雄、坪清巳、糟谷式郎 内田勝子	
作業員	岡崎武一、岡崎時枝、岡崎うめ 須田進、安達登、笠井忠 (バックホー)	
A地区 考察 記	全体測量、写真撮影、土器・石器収納 住居跡の遺構1戸所在したものと思われるが、破壊が大きく、確認が困難である。多分、住居地を破壊して、遺物等を廃棄した場所ではないかと考えられる。	
B地区 録	No.1 トレンチ、住居跡1棟 No.2 トレンチ、住居地1棟	が想定されるが、道路拡幅の為限られた面積なので、全体遺構の確認はできなかった。
A、B地区埋め戻し完了 まとめ 備考	まとめ 本郷遺跡(仲原台地)一帯は、縄文中期の集落地と考えられ、今回の発掘によって、貴重な遺物を採集することができた。	記録者 鈴木光雄

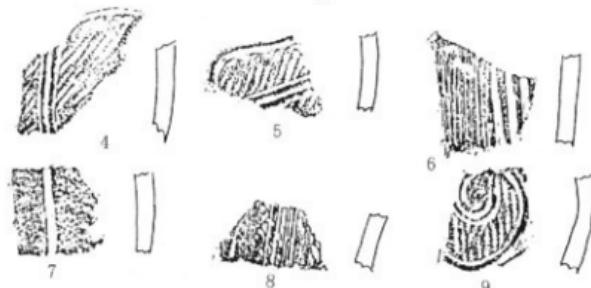
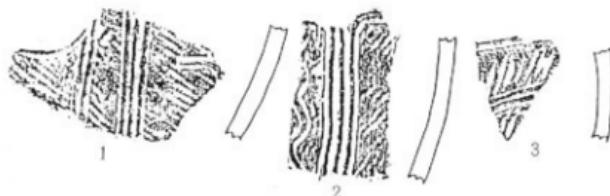
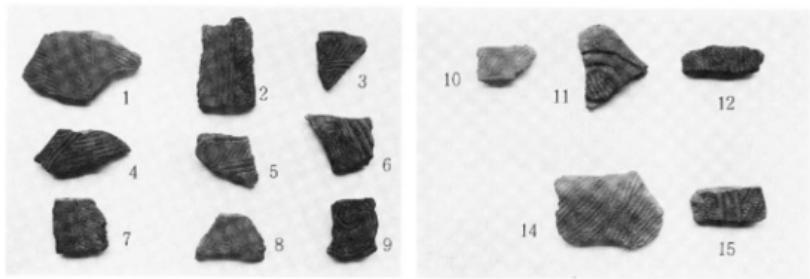


本郷遺跡 B 地点 T - No. 1 土器拓影図



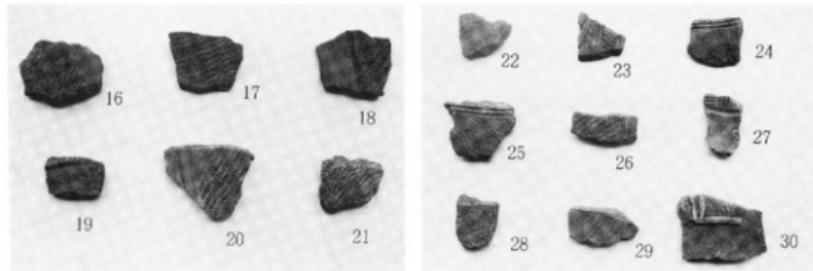
0 5 10 cm



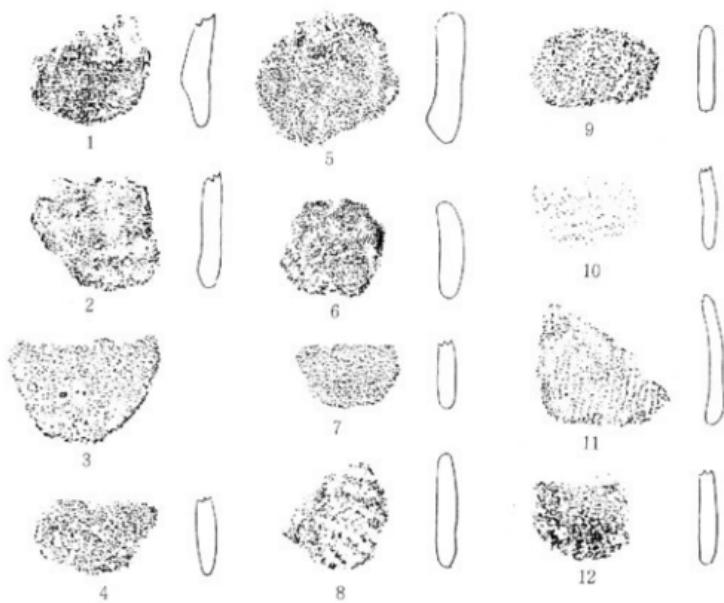
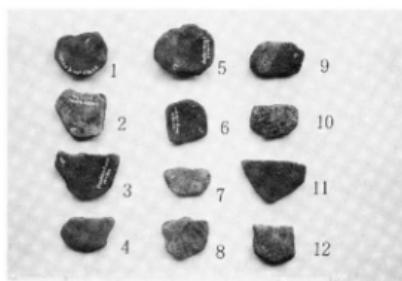


0 5 10 cm

本郷遺跡 B 地点 T - No. 2 土器拓影図



0 5 10 cm



土 製 円 板 拓 影 図

発掘調査会役員及び作業従事者名簿

役員区分	氏 名	選 出 役 職 名
会 長	岡崎 実	緒川村教育委員会教育長
副 会 長	平塚 弘	緒川村文化財保護審議会委員長
理 事	高井 良男	緒川村文化財保護審議会委員
"	石川 豊	"
"	小野 関雄	"
"	柴田 倭	"
"	萩原 義照	主任調査員
"	茅根 正憲	調査員
幹 事	本橋 久則	緒川村教育委員会事務局長
"	鈴木 光雄	緒川村教育委員会社会教育係長
"	坪 清巳	緒川村教育委員会社会教育主事

発掘調査作業従事者名簿

調査主任 萩原 義照

調査協力員 茅根 正憲, 高井 良男, 石川 豊, 小野 関雄

調査協力者 小林 茂, 岡崎 義行, 森嶋 正, 森嶋 兼松, 長山 シモ

作業従事者 須田 進, 安達 登, 大和田 勤, 岡崎 武一, 岡崎 時枝

岡崎 うめ, 笠井 忠

事 務 局 本橋 久則, 鈴木 光雄, 内田 義則, 三村 操, 稲谷 式部

坪 清巳, 内田 勝子

(文責 鈴木)

む　　す　　ひ

緒川村の、道路（農道）整備計画に伴う、本郷遺跡の発掘調査は、以上述べてきた内容であるが、発掘調査期間や面積など、限られた条件のなかでは、遺跡の範囲及び性格等について、充分調査することはできなかった。しかし、大量の縄文土器破片の埋土（遺物包含層）と、一部遺構の確認によって、この仲原台地一帯を範囲とする、本郷遺跡には、住居跡その他の縄文時代の遺構が、存在していることは間違いない。

おわりに、今回の調査にあたっては、岡崎教育長をはじめ、諸川村教育委員会から、多くの御援助をいただいた、とくに調査事務などに、格別のご配慮を賜わった鈴木社教係長に厚く御礼申したい。

また期間中、ご来訪くださいされた、水戸教育事務所社会教育課長大川武先生、同社会教育主事青木邦久先生に、懇切なご指導を賜わった。その他地主の方や、地元作業員の暖かいご好意があったことに対しても、ここに記して感謝の意を表したい。

